

朝鮮語「アリラン」の南島語起原について

——古代三韓地域と南島系語彙——

芝 烝

要 旨

朝鮮語「アリラン」alilan^(*)は、それがこの半島民族の数奇な運命と歴史とを生きてきた哀歎を象徴するかのような歌詞と旋律で、その最も代表的民謡であることは内外に周知であるが、これまでいづれの辞書にも項目すら見えず、『朝鮮語大辞典』（大阪外大，韓日合同 1985）でさえ、民謡の名称としてのみで、起源はもちろん、意味にも触れていない。

注(1) 朝鮮語の表音記号には l と r との区別がないので便宜このように表記した。その理由について何方かの説明が聞かれれば有難い。日本語の場合も両音の区別はなく、その理由については筆者の一応の立場はあるが、朝鮮語の系統全体について発言するのはもちろん越権と思われる。

I. アリランは南島祖語（動）alir <流れる>；（名）aliran <流れ；分水嶺>である。O. デンプヴォルフ（1938）；O. カロウ（1962）参照。日本語ではどうであろうか。「流れる」nagareru は十分に祖語“alir”への再構成が可能であると考えられ、また書紀をはじめ阿利，有田川，有間川，有栖川，在原，など<流れ；川>の意味の可能性の高いものが多い。

II. 古代三韓地域の南島系語彙

「韓」とはなにか。今日も国号であるが、その意味，起原の確認は歴史と国家理解の出発点ではなかろうか。

a) スサ (素戔鳴尊 ; 須佐国)

susah インドネシア語〈困難な, 面倒な〉: 出雲神話における須佐国, その祖神スサノヲの項では内容的に新羅との関わりの多いと伝えられ, それは確かであろうが, 少なくとも名称は南島語であり, 尊の別名を牛頭天王というのは, 朝鮮語で牛を so ということから, susah の語頭音をとったものと, 疑問がもたれる。

b) pada 〈海〉の南島祖語は padan 〈芝原: 平原〉。ワタツミ 〈海神〉; ヤワタ 〈八幡〉; ワタル 〈渡〉。

c) shom 〈島〉の南島祖語: simbang 〈海鳥; 島〉

d) 「新羅」の南島語の可能性—新羅は辰韓と呼ばれたが, 辰—東方—光。他方, 新羅は慶州の斯盧国の後といわれ, 光—照—白。これらは南島語系に連なる可能性があるのではないか。つまり, 黒潮の北上と朝鮮海峡の南北兩岸の地勢と文化の類似性の問題。

本 論

I. アリランの南島起源について

アリランの南島祖語は O. デンプヴォルフの『南島語彙の比較音韻論』Ⅲ (1938) によると, 'alir 〈(動) 流れる〉。In. Ml. alir があり, O. カロウ他『インドネシア=ドイツ語辞典』(1962) では, alir (動) 〈流れる〉; aliran (名) 〈流れ; 分水嶺〉であり, これらの事実から件の民謡の歌詞「峠をこえて」が理解できよう。

次に, このような南島祖語 alir; arilan と日本上代語との関係はどうであろうか。われわれには上代の阿利, 有田川, 有栖川, 有間川, あるいはその系統をひく語であろうと考えられるが, しかしこれらについては, このままでは状況証拠程度で確実な推論は得られにくいので, 先ず本質的な課題に関わる事例としては,

日本語「ナガレ」nagare 〈流〉の祖形復元について

一見しただけでは *nagare* 〈流〉 と *alir* との間に何の関係もあるようには見えないが、この祖形の復元には南島諸語の文法ならびに音韻構造の特徴に関わる問題がある。これについてここで説明することは南島諸語の特徴に通じておられる多くの方々には今更と思われて、失礼なので、以下（注）の形にさせていただきます。

注(2) 戦前・戦中、西南太平洋の広大な地域での詳しい現地調査（それは政府や軍の要請による面もあったかと思われるが）の資料にもとづき、本格的な比較言語学的方法で、わが国の南島語学の基礎を確立された泉井久之助先生によれば、「マライ・ポリネシア諸語の基語の構造は語根を中心として接頭・接中・接尾の接辞をつけ、あるいは語根の重複による。基語は原則として2音節である。」（『マライ・ポリネシア諸語〈南島諸語〉』世界言語概説 下巻 p.1049）と。また、「動詞的接辞。その主なもの。」について、「1. **ma-*（接頭）（実際には *mə-* として現れる）最も普遍的な動詞的接頭辞。基語を能動（他動）の動詞化するとともに、また本来動詞的な意味をもつ基語を、文において正に動詞として特徴づける。これがつくとき、基語の語頭に前鼻音化の起きるのが通例である。…」 「2. **βa-*, **βaɣ*（接頭） 実際には *βə-*, *βər-* として現れるのが常である。〈…を蒙れる； …を帯たる； …の状態にある〉こと（自動）を示し、…」 「3. **ta-*, **taɣ-*,（接頭）（一般には *tə*, *tər* として現れる。）」 「動作・行動に完結性のニュアンスをもたらし、したがって行為の結果として生じた状態を示す。それで一種の完了分詞として、言語によっては受動形の構成にあづかることもある。」と。

ここに挙げたのは、南島諸語の、印欧諸語やアルタイ諸語と大きく異なった文法構造や音韻構造をもつこと、すなわち第一に、動詞の機能が具体的に作用する場合に、接辞が基語に前接する、つまり接頭辞の形をとること。第二には、上記の1. の *mə*（およびその変形 *məm*, *mən*, *məng*, *mənj*）の場合、基語の語頭に前鼻音化現象の起きること。なお第三には、基語は一般に2音節であることである。

なお、このような性格をもつ南島起源の日本語の身近な例の一つには、ムダク〈抱く；ウダク；イダクともいう〉があるのは周知である（時代別国語大辞典 上代篇 三省堂）。

村山七郎先生の精確な分析と復元によれば、「インドネシア諸言語においては、さまざまな意味をもつルート（基語；語根）に接頭辞がついて、動詞が形成されますが、ここでは *maN- をとりあげます。……この接頭辞はインドネシア諸語において次の形をとります（以下、筆者の要約）。マライ語型（インドネシア語）məN, 古代ジャワ語型 [m]nN-, ジャワ語型 [ma]N-; [mə]N- になる。……

[] はじっさいの使用において脱落することを示します。（崎山 理 1971年による）」……

「マライ語では *dakəp が dakap としてあらわれ、məN- により məN|dakp 「抱く」がつくられます。

ついでながら、ウダク、イダク、はそれぞれ *[mə]N|dak-, [m]iN|dak- からの発達形です。*[m]iN- は *[m]əN- の異形です。つまり、ウダク、イダクはルートに古代ジャワ語型の接頭辞がついた形から生まれたとみられます。そして口語系のダクは、*[mə]N|dak- からの発達です。……沖縄（首里方言）方言の dacuN 「抱く」は…… *[mə]N|dak- の発達形です。」（『日本語の語源』1974, pp. viii）

南島諸語のこのような性格こそ「それは単に日本語の基層的構造ではなく、正に日本語の核心である」と村山先生の強調されるところである。先生はベルリン大学の言語学教室で比較言語学、アルタイ系諸語、アルタイ比較言語学を学ばれ、とくにツングースの専門家として、同大学を中心に国際的に活躍されたが、「アルタイ諸言語からの探求では、日本語の真の性格とその核心の解明にはいたりえない」との確信から、戦後は一転して、南島諸語の研究に没頭され、泉井先生の基礎の上に、日本語の起源・系統の解明に画期的な発展をもたらされた。先生のこのような研究態度は名利を度外視した学問的良心と勇氣に根ざした稀な例というべきである。

研究者もともすると、いわゆる専門家であることに安住し、世間の名利に甘んじて、自らの研究の在り方に対する厳しい反省や改革に消極的になりがちであるから。しかも先生の場合は、南北の系統を両面から総合し、日本語の起源・系統問題について、具体的全体像を構築するのに、大きな推進を果たされたということができよう。

上記のような南島語の性格を踏まえて、日本語の「ナガレ」*nagare* の祖形復元を試みると、上記の接頭語 *mə* は通例は他動詞として機能するときであるが、ごく少数の例外として自動詞のばあいがあり、*alir* 〈流れる〉もその一つである。この語は、このままの形でも動詞の意味をもつが、実際に活用されるときは、この意味をもつ基語となり、接頭辞をとるが、語頭が母音なので接頭辞は *məng* をとり、*məng+alir* 〈流れる〉となる。この場合、村山先生の分析の型にしたがい、かつ *ŋ* を頭わすと、 $[mə]Nŋ+alir \Rightarrow Nŋ+alir$ となり、さらに *Nəŋalir* と変容しつつ原始日本語 *nagaru* (動) ナガル〈流る〉; *nagare* (名) ナガレ〈流れ〉へと移行したと考えられる。

ここで、初めにあげた有田川、有間川、有栖川、在原などのアリも *alir* 〈流れ〉の意味であるということができよう。有栖川の栖は〈洲〉に当てたもの、在原は〈河原〉に当てたものではあるまいか。さらに長良川もナガレ〈流れ〉に由来するかもしれない。

Ⅱ. 古代三韓地域と南島語

韓とはなにか。古代朝鮮半島南部に三韓とよばれる国々が存在したが、韓は李王朝が朝鮮の国号として以来、今日の大韓民国のそれでもあるが、その意味はほとんど語られていないように思われる。知人の学者に確かめても、大という意味のようであるが、釈然としない。もとより多くの場合と同じく、韓の人々自身によるものではなく、中国人の命名によるはずである。韓は、その本来の字義では〈井桁; あるいは井戸の周りの囲い; 周りの垣根〉といわれているから、1) 広い意味で〈地域〉くらいの意味で用いられたのであろうか。例え

ば、今日中央アジア方面に多い—スタン（カザフスタン、ウズベキスタン、アフガニスタンなど）といわれるロシア語—стан は〈国〉というよりは、〈地区、管区〉などの意味で用いられてきたようである。2）文字通り〈井戸〉ならば、戸であり、家である。井戸こそは人家の本質であり、東北地方にある〈八戸〉とか〈三戸〉の地名にあるとおりで、近畿地方でも古代の飛鳥、羽曳野市の〈飛鳥戸神社〉であり、飛鳥部ではないことで知られる。つまり、村落・集落ととることでもできよう。

辰韓・馬韓・弁韓について—これは三者の位置を十二支によって示したものと考えるのが自然であろう。子午線といわれるように真南が午（馬）、東南が辰である。もちろん、報告者の位置は当時の漢の四郡、楽浪あるいは帯方などからみてのことと考えられる。では弁韓とはなにか。弁（辦）は「瓜を二つに割った形」といわれているように、中間とか、媒介とかいう意味に用いられる。ここでも百済と新羅との間であった任那や伽耶などを意味すると解してよいのではないか。

そこで済州島や上記三韓地域を通じ、南島から黒潮に運ばれて半島に伝わったであろう朝鮮語の問題であるが、筆者は、金廷鶴教授も、その専門である考古学の立場から、「韓半島の民族的・文化的特徴は北アジアから南進した勢力が支配的であるが、南部地方には南部アジアからの潮流がかなり基層に存在していたように思われる」（『日韓古代国家の起源』1970, p.136）と述べられているような点を踏まえた上で、いくつかの語彙の検討を試みたい。

1) susah 〈須佐・素戔〉（須佐之男・素戔鳴）

この語は、このままが朝鮮語の語彙にあるわけではないが、次に触れるように、朝鮮語に誤読されたと思われるので挙げた。

記・紀や出雲風土記にあるように、主に須佐国や素戔鳴尊の暴行乱行などの形容に用いられているが、O.カロウ共著では、〈苦勞・疲勞；不愉快・嫌悪；困難・面倒〉などとなっている。日本語でも、『時代別国語大辞典』（三省堂）では、スサに関してはスサブのみであるが、〈一途にふける；勢い盛んに

なる；自然の勢いのままにまかせて、止まらない」とあり、『岩波 古語辞典』には、スサビ〈荒び・遊び・弄び〉、スサマジ〈ものすごい・恐怖でぞっとする〉などがある。なお、次は参考までにであるが、中世になってからと思われるが、スサ〈寸莎〉で、「建築の壁を塗るとき、壁土に混ぜて亀裂を防ぐための繊維質の材料。刻んだ藁とか、麻・紙などに海草の煮汁を混ぜて使う」（同上）ものであるが、これもこの南島語からきた語ではあるまいか。

さて、素戔鳴尊であるが、出雲に天下る前は新羅ということも記されている。書紀神代上の一書（第四）には、高天ヶ原を追われて、新羅国に天降りして、曾之茂梨に在ったが、この国には居るのを欲せず、埴で舟を造り多くの従者達と東に渡り、出雲国の簸の川の川上に在る鳥上の峯に至ったとある。他方、素戔鳴尊は京都八坂神社のご祭神のごとく〈牛頭天王〉と称せられる。これは何故であろうか。朝鮮語で so は〈牛〉であるから。つまり7世紀頃の朝鮮半島からの渡来知識人たちが上記の事情により、尊の御名の語頭の一音からこのような命名になったのではなかろうか。

2) pada 〈海〉

O. デンプヴォルフの南島祖語をみると、pa(n)dan 〈芝原，草原，平原〉で、タガログ語では paran, トババタク語，ジャワ語で padag, Ml. ンガージュダヤク語で padan 〈芝原〉などであり，またホヴァ語では，fandra 〈平野；森の中の空地：湖沼〉である (s.10) が，これらのイメージから〈海原〉へと広がったのであろうと考えられる。

日本語の場合では，よく知られるようにワタツミ〈海神〉であり，pada から八幡・木幡などのごとく fata へ，さらに wata へ，というように子音交替が行われている。西南太平洋の島々から黒潮にのって北上してきた日本人の祖先にとっては，海はワタリ〈渡り〉であり，ワタシ〈渡し〉であるから，ヤワタ〈八幡〉の大神としての市杵島姫は宗像三神をはじめ，宇佐八幡，巖島神社，石清水八幡というように海神信仰の歴史を形成してきた。

3) som <島>

この語については、前掲のO.カロウ共著に、simpang <分かれる、曲がる、外れる、三叉路など>があり、村山先生はここから、シマ<山齋>、すなわち人里を離れた山の書齋を推定されたが、これは島の観念が前提になっているのではなかろうか。島の観念の要件には<外れる>はともかく、<分岐>では十分でなく、<分離>が必要であろう。一定の陸地が沿岸から分離・孤立するのが島である。

ここで筆者はさらに、simbang <海鳥：かもめ、あほうどり、など>に注意してはどうかと思う。海鳥と島との関係について。筆者はこれまで、なにげなく島という漢字を読み書きしてきたが、ふとその成り立ちを注意してみると、島は<鳥+山>であるが、島は形・声ともに鳥であるという。海鳥が飛び交いはじめ、洋上の彼方に山の浮かんで見えてくるとき、長い航海をつづけてきた船乗りたちの感慨をこの上なく表象させるものではなかろうか。これは中国大陸沿岸民族の知恵であろうが、朝鮮語への移行がどうであるかは別としても、南島語の日本列島への移入の場合、偶然にも共通していた現象であったということができよう。

4) Shilagi <新羅>

新羅は韓族の初期農耕社会から生まれた村落共同体的性格のきわめて強い国家であったから、「征服王朝の性格をもつ高句麗とは」「その政治形態において基本的に異なっていた」と井上秀雄氏が指摘されている(『古代朝鮮』p.138)が、その始祖神話ではなおさら、新羅王の政治的権限は虚弱なことが知られる。また、『三国史記』の「新羅本紀」に登場する人物は、「倭から、海をわたってきた」というような記事も見られるが、これらは、もとより伝承ではあるが、考古学の権威、金元龍教授のいわれる「プロト三国」時代として、黒潮の北上する朝鮮海峡を挟んで向かい合う九州や中国地方の風土との共通性の可能性が示唆されていることも否めないであろう。

また、新羅から日本に渡来した人々には、シラキ；シロキ<白木>という姓

の人々が今日も現存していることも示唆をもつ。

辰韓〈東南・曙光の国〉新羅は斯盧から起こったといわれる。təlaŋ〈明るさ・照る〉1N, タガログ語で〈曙光〉; ジャワ語, マライ語 teraŋ〈透明さ〉(O. Dempwolff, III. s.134)。インドネシア語 sɛlau〈まぶしさ〉(O. カロウ共著, s.379)。また, 例の, 有明海のいわゆる シラヌヒ〈不知火〉は誤解で, しら・な・ひ〈光の火〉であり, な na は南島語特有の連辞で, ミナツキ〈六月:水の月〉のナ; タナゴコロ〈掌:ての中〉のナである(村山, 『日本語の語源』 p.102, 236)。

キ シラキのキは南島語の kui〈木〉に由来する〈杖・城〉と考えられる。井上秀雄氏も古代三韓地域には, その特有の地勢から多くの〈山城〉のあったことを述べておられる(『古代朝鮮』 p.132)。

以上

参考文献(主なもの)

- O. Dempwolff: Vergleichende Lautlehre des Austronesischen Wortschatzes
III. Band 1938
- O. Karow- I. Hilgers-Hesse: Indonesisch-Deutsches Wörterbuch 1962
- 泉井久之助 「マライ・ポリネシア語(南島諸語)」(『世界言語学概説』研究社 1955
下巻 p.1001
- 村山 七郎 『日本語の語源』弘文堂 1974
- 同 『日本語の研究方法』弘文堂 1974
- 同 『日本語系統の探求』大修館書店 1978
- 井上 秀雄 『古代朝鮮』NHK出版協会 1972
- 林 英樹 『三国史記』上 新羅本紀 三一書房 1974
- 金廷鶴・金元龍編 『日韓古代国家の起源』六興出版 1980
- 芝 烝 『日本語の系統 基本論文集Ⅰ』和泉書院 1985
- 同 『日本語の起源—系統と検証』新風舎 2005